

脱・地元 名大生、進む留学



インドネシアに留学し、ジャカルタの日系企業でインターンをした永田碧さん(奥右から3人目)＝永田さん提供

プログラム充実 4年間で5倍

海外への留学生が全国的に減る中、名古屋大学では2013年度、学部生だけで3042人が留学し、4年間で5倍近く増えた。自生が多い名大生に、浜口道成総長は「留学のススメ」を説き続け、「年間千人」を目標に掲げる。

「海外に出て、孤独の中で自分の本当の力を試してみたい」

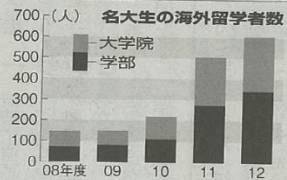
浜口総長は毎年、入学式のあいさつで、新入生に呼びかけている。

愛知出身が半数

名大生は愛知県出身が半数、東海4県に占げると7割を占める。自生が多くなる「独立心を育てるためにも下宿や留学を」が持論だ。

掛け声だけでなく、12年度にはシンガポール国立大やハノイ法科大(ベトナム)など東南アジアの7大学と提携した「キャンパス・ASEAN」と呼ばれるプログラムを始めた。2、3週間の短期留学や、単位の互換やインターシップもある半生留学があり、国の補助も学生はほぼ自己負担なしで学べる。

ほかにも中国、韓国、インドネシア、単位認定される「アジア」単位認定される「ヨーロッパ」などの語



学研修、会話トレーニングに重点を置いた中国語研修なども新設した。

短期を含めて留学した学部生は08年度は79人しかいなかったが、浜口総長が就任した翌年の10年度は112人、11年度は144人、12年度には342人と増えた。大学脱生も08年度の73人から12年度の263人に大幅増。13年度も増加傾向だという。

法学部3年の坂本あずささん(20)は、入学式での浜口総長の祝辞に「ワフワフさせられた」という。キャンパス・ASEANに応募し、1年時にベトナムやイ

大学は独り立ちのプロセス

浜口総長語る



質なものを排除する社会になりつつある。学生も個性を表現しなくなっています。「無防備に個性を出すと、いじめにあう」と無意識に防御している。でも、それではグローバル時代に生きのびられないし、日本の活力も失わせる。海外の多様な文化や価値観と格闘する中で、力強さが生まれてくると思うのです。

留学や下宿は初めの一步。小さな勇気を持ち、「プチ成功」を重ねて人間は成長していく。その機会をどれだけ提供できるかが高等教育の価値だと思う。おとなしいイメージだった名大生も、はっきり物を言う子が増えてきた。さらに増えれば、もっと雰囲気が変わると思います。

入学式で「今朝、自宅から来た人は？」と聞くと、毎年7割ぐらいの手が挙がる。大学は独り立ちするプロセスだから、下宿しなさい、それが出来なければ海外に行きなさい、と言っています。

私は18歳で下宿し、30歳を過ぎて米国に留学。ラボ(研究室)には30人ほどいたが、母国語は10カ国語ぐらい。価値観がぶつかり合う経験をしました。

今の日本はどこか同じような光景になり、マニュアルが無いと動きにくい社会です。裏を返せば、異

る事業擁護したい」と考えている。

国も支援を強化

文部科学省のまとめでは、日本人の海外留学者は11年度は5万7501人、12年度は8万2945人をピークに減少を続けている。国も危機感を強め、海外留学支援制度を年間36億円(13年度)から70億円(14年度)に増やされた。

(日本経済新聞)